



## 特集 学術情報・電子ジャーナルシンポジウム

附属図書館は国立情報学研究所(NII)との共催により、「大学における学術情報資源の整備 電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革」と題された公開シンポジウムを2004年9月16日に、京都大学百周年時計台記念館において開催しました。当シンポジウムは、学術コミュニケーションの改革をめぐる国際動向とわが国における対応に関する理解を深めることにより、電子ジャーナルをはじめとする学術情報基盤整備にあたっての課題を確認し、その解決策を見出すことを目的として企画したものです。本号は、「学術情報・電子ジャーナルシンポジウム」特集号として、本シンポジウムで発表された基調報告やパネル討議の一部を抜粋して掲載します。

## 主催者挨拶

京都大学理事・副学長 金田章裕

大学における学術情報と言いますのは、古典的には書物の形を取った紙に印刷をした媒体の資料がどうしても中心でありました。これは今でも引き続き続いているわけですが、新たに電子媒体での学術情報というのが、極めて重要な役割を果たす段階に現在立ち至っております。ただし、紙媒体の様々な学術情報と、電子媒体での学術情報とでは、その利用の仕方、保存の在り方だけではなく、それらの情報に対する価格設定のシステムそのものが大幅に異なっているという状況がございます。

そういった新たな状況のなかで図書館は、京都

大学においてそうでありまして、何処の大学でもそうなのだろうと思いますが、様々な形で学内の電子学術情報維持に日頃尽力をいただいているわけです。しかしながら、電子ジャーナルの価格高騰、電子情報に関する学内予算の確保などいくつかの新たな問題に直面せざるを得ないという状況に立ち至っているのが現状であろうと思います。

そこで本日はそういった状況に対して学内での理解を深め、今後のより良い方策を探るための基礎的な情報交換、意見交換をすることを主たる目的として、このシンポジウムを企画させて頂いたわけです。

午前中には三つの基調報告を頂きまして、電子ジ

ジャーナルをめぐる様々な最先端の状況についてご紹介を頂くことになると思います。また、午後には二つのパネルディスカッションを通じまして、一つは京都大学が直面しているいろんな問題を含めた議論や全般的なあり方についての議論を展開して頂くということで、初期の目的に大きく近づけるのではないかと期待をいたしております。

本日、その報告あるいはパネリストとしてご出

演していただくことをご了承いただきました方々、あるいは準備にいろいろとご尽力をいただいた方々にも御礼を申しますと共に、今回のシンポジウムで十分な成果が上がりますことを期待しております。本日、長丁場になりますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

(きんだ あきひろ)

## 基調報告(1)

### 電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み - 国立大学図書館協会電子ジャーナル・タスクフォースの活動 -

名古屋大学附属図書館長 伊藤 義人

名古屋大学の伊藤です。今日は「電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み - 国立大学図書館協会電子ジャーナル・タスクフォースの活動 - 」というタイトルで講演させていただきます。

今日の予定は、先ず始めに「図書館を取り巻く新しい時代の背景」ということで、電子ジャーナルの話に入る前にこのことを話しておきたいと思っております。次に「学術情報と電子ジャーナル」として、電子ジャーナルの歴史的な経緯等について話をします。三番目には「学術情報収集のコンソーシアム - 電子ジャーナルコンソーシアムの形成 - 」として、いわゆる国立大学図書館のコンソーシアムを立ち上げましたので、世界的には、規模としては非常に大きなものですが、それがどういう経緯で立ち上がったかをお話いたします。

#### 図書館を取り巻く新しい時代の背景

情報化社会ということで、インターネットの爆発は、図書館にとってみれば歴史的な転換点となりました。図書館は何千年の歴史がありますが、紙に書いた物、もっと前は羊皮紙に書いていたのですが、物に書いた時代からデジタルの時代にな

ったということが大きな変化です。実際この十年間で図書館の利用の仕方は大きく変わっています。図書館機能の変革要求で、デジタル情報を扱うことが必須となっています。紙媒体をやめられればよいのですが、これはずっと残ります。貴重な資料という意味だけでなく、現用の資料としても紙は当面、特に大学には残らざるを得ないと思っております。デジタルと紙情報を有機的に結合して、どちらも補完し合う、すなわち電子図書館機能と従来型図書館機能を融合したハイブリッド図書館を作ることがが大学図書館の使命になっています。

もうひとつは大学全体の変化で、20世紀から21世紀のパラダイム転換と言われているもので、価値観が変わり、経済第一主義から環境・人間を重視した社会への変化を背景に、大学自体にも多様な要求が出て来ています。融合型の学問領域が現れ、従来型の部局中心の図書室や図書館ではとうていその役割は果たせなくなってきています。学内構成員だけではなく、生涯学習だとかNPO、NGOなどの市民の要求に対しても対応しなければならないという劇的な変化があります。大学も企業的な努力だとか、図書館も運営ではなくて経営をなささいということが明確に言われています。最近、